

研 究 紀 要

第 7 号

1 9 9 0

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

- デポの意義栗島 義明(1)
—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—
- 立野式土器についての一考察中島 宏(45)
- 東国における後期古墳山本 禎(67)
—凝灰岩を石室構築材とした横穴式石室—
- 中田以前の土師器研究大屋 道則(93)
—編年研究の原則と分類方法の変遷—
- 瓦塔瞥見高崎 光司(209)
- 古代～中近世の井戸跡について(1)鈴木 孝之(217)
—埼玉県における形態分類を中心として—
- 北武蔵における古瓦の基礎的研究IV昼間孝志・宮 昌之(273)
木戸春夫・高崎光司
赤熊浩一

立野式土器についての一考察

中 島 宏

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 はじめに | 4 東海地方における押型文土器の動向 |
| 2 立野遺跡の押型文土器と立野式土器 | 5 結語 |
| 3 岡本論文の評価 | |

1 はじめに

多くの縄文土器型式の中で、昭和32年、神村透氏によって報告された長野県飯田市立野遺跡をタイプサイトとする押型文土器「立野式」ほど編年位置、その系譜が論議され続けてきた土器型式もめずらしいだろう。『押型文土器群編年研究の「台風の眼」』（戸沢1978）といわれる所以である。立野遺跡と同じ頃調査、報告された長野県岡谷市樋沢、同諏訪市細久保遺跡の押型文土器が各々樋沢式、細久保式と設定されて、中部地方の縄文時代早期編年表に安定した位置が与えられているのに対し、立野式は今でも迷走し続けている。樋沢・細久保式は細部に問題を残しながらも樋沢→細久保の序列が認知され、全国の押型文土器編年の指標となっているが、立野式土器はこの編年序列のどこに位置づけられるのか、具体的には樋沢式以前とする見解と、以降に位置づける見解とに大きく二分されている。この問題は、立野式と親縁な関係にあるといわれてきた近畿地方の大川系列押型文土器の動態ともからみ、押型文土器の起源にかかわる重要な問題で、単に土器型式編年上の問題にとどまらない。

立野式の提唱者である神村透氏は、これまで一貫して立野式を樋沢式に先行させ、中部地方最古の押型文土器に位置づけてきたが、その根拠となっていた層位的事例が再検討され、また前提となっている神宮寺式と大川式の編年が逆転した現在、その編年観は抜根的な見直しを迫られている。

このような研究状況にある中、昨春発表された岡本東三氏の「立野式土器の出自とその系統をめぐって」と題する論文（岡本1989、以下、岡本論文とする）は、「立野式は古いのか、新しいのか」といったこれまでの論議を越えて、関東から近畿地方にかけての押型文土器群の編年フレームを構築する、まさに80年代の押型文土器研究を総括したものと筆者は読んだ。

本稿では立野遺跡の押型文土器を概観し、以下岡本論文を下敷きにしながら、立野式土器について考察してみたい。

2 立野遺跡の押型文土器と立野式土器

原体に凸部を連ねて彫刻し、器面に凹文様をつくるネガティブな押型文様を特徴とする立野遺跡の押型文土器は、帯状構成の樋沢式、非常帯構成の細久保式と区別される中部地方第三の押型文土器型式と位置づけられている。神村氏による報告では類例の不十分さから型式としては提唱されて

いないが、これに先立つ昭和29年、芹沢長介氏の「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」の編年表に登場していた(芹沢1954)。神村氏もその後「立野遺跡で発見された押型文土器とそれに伴出する一群の土器」を立野式と認定されている(神村1969b)。しかし、その型式学的特徴は「山形文を樋沢遺跡や細久保遺跡とくらべて見ると、口頸から縦に全面に施文されており、陰の部分が陽の部分より大である。樋沢・細久保両遺跡のそれは陽の部分が陰の部分より大である。器厚は立野遺跡の方が厚い」(神村1969a)と説明されていただけにすぎず、「当時としてははなはだブロークンな押型文という印象」(戸沢1978)が強く、土器型式として十分に整備されないままに、細久保式でもなく、さらに樋沢式にも含まれない土器群として見切り発車していた。ここに以後、編年上迷走し続けた原因がある。

以下にまとめる立野式に関する情報は、70年代以降、資料の急増期を経て得られた資料によっている。

立野遺跡の押型文土器(第1、2図)には市松文(1~18)、格子目文(19~39、56~61)、山形文(40~50、76~78)、楕円文(51~55)、縄文(62~67)、撚糸文(68~75)がある。市松文のなかにはネガティブな楕円文(1~5ほか)が含まれている。立野式の良い資料を提供した三つ木(林1983)、林頭・二本木・稲荷沢(神村1983)遺跡等でも同様の文様種が認められる。これらの遺跡例を参考にすると、立野式の文様構成は次の3種が主体となるようである。

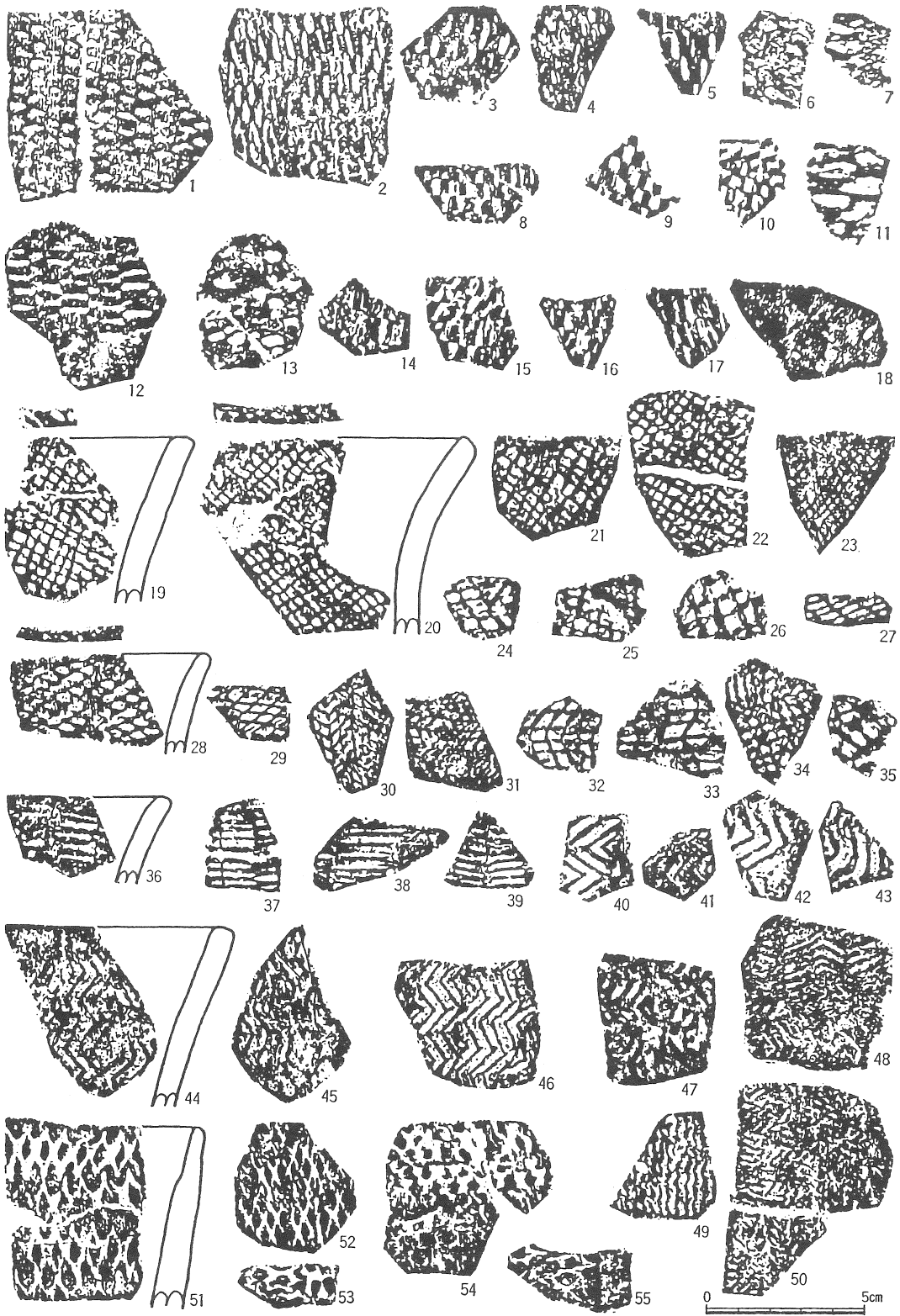
- 1 縦位密接構成(市松文：林頭、山形文：立野、楕円文：石子原、格子目文：三つ木、ネガティブ楕円文：二本木)
- 2 口縁部一横帯以下縦位密接の異方向構成(格子目文：三つ木)
- 3 口頸部縦位以下横位密接構成(楕円文：赤坂、格子目文：御座岩、ネガティブ楕円文：赤坂)

ほかに縦位密接構成にちかいが、縦帯間を指でナデ消したような狭い無文部をもつ例が格子目文にある。この準帯状構成ともいうべき構成は、後述するように樋沢II式との連絡を考慮し得るもので、重要である。

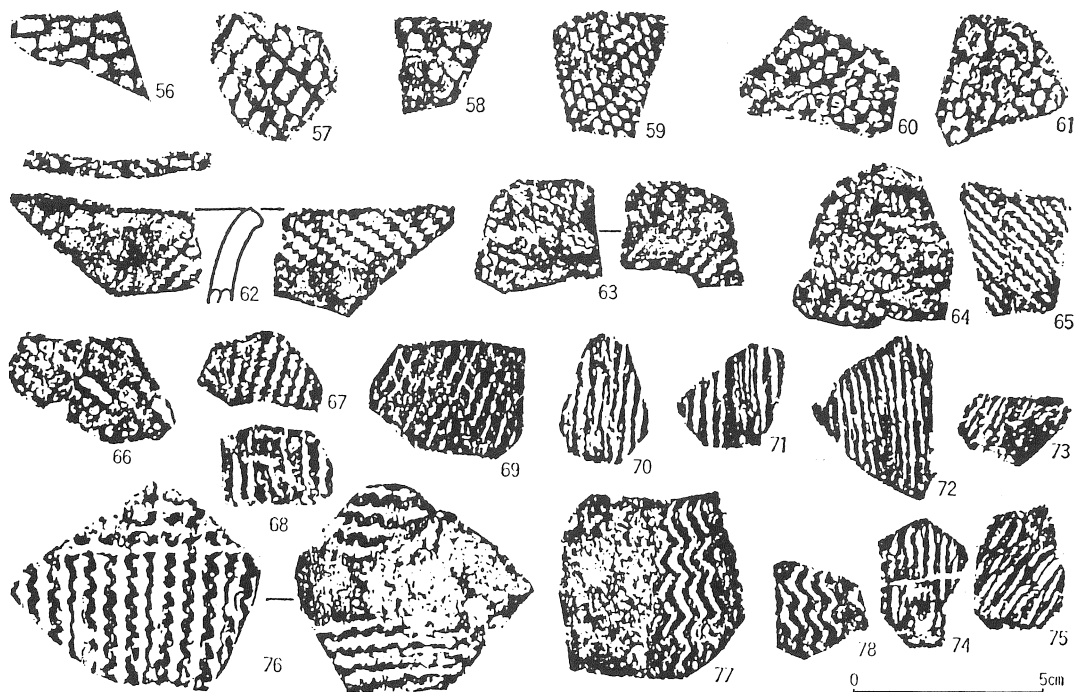
神村透氏は立野遺跡の押型文土器のうち、4層(早期末)出土の2片の山形文土器(第2図77・78)を除いて土器を立野式としてとらえるが、他に48・50・76などの異方向構成の山形文も樋沢II式に含まれるものである。また「立野式の表裏縄文」として有名な62も、縦位帯状構成で横山遺跡の同種の縄文の土器と等しく、これも樋沢II式の範疇にある(註1)。表裏縄文では内面の施文が口縁部に限られるこの例の他、胴部深くまで施文される類がある。立野遺跡では少ないようであるが、稲荷沢遺跡ではまとまっている。この種の表裏縄文土器を椀の湖II式に直結させるのではなく、向山遺跡(友野1983)における格子目文、山形文との住居跡内伴出例及び増野川子石遺跡(酒井1983)の口唇部に山形文が施文された縄文の土器(註2)を積極的に評価して、押型文土器との共伴を先ず考慮しなければならないだろう。

立野式の3種の文様構成のうち、1 縦位密接構成、2 口縁部一横帯以下縦位密接の異方向構成は樋沢II式及び大川式(松田真一氏による文様構成B、A3、松田1989)と共通し、3 口頸部縦位以下横位密接構成が立野式に独特の構成と認められる。

文様種については市松文、ネガティブ楕円文、格子目文が大川系列押型文土器と密接な関係にあ



第1図 立野遺跡の押型文土器(1) (神村1983d から転載)



第2図 立野遺跡の押型文土器(2) (神村1983 d から転載)

ることはこれまでに度々指摘されてきたところであるが、両者の型式学的異同が深くとわれたことはなかったといえよう。

長野県の押型文土器をⅢ期5型式（Ⅰ期：立野式、Ⅱ期：樋沢式・細久保式、Ⅲ期：高山寺式・相木式）に編年する神村透氏は、立野式のネガティブ文（凹文）を神宮寺・大川遺跡ものと「同一群の土器」（神村1986 a）としながらも、Ⅰ期に相当する近畿地方の押型文土器（神宮寺→大川式）が「東漸してきたのが立野式である」（神村1986 c）とみて、樋沢式に先行する位置に置く。この編年観は数年来支持者が増え、現在かなり優勢である。しかしこの編年観に付随する、立野式と樋沢式との間の型式学的不連続を説明できない、という致命的な欠陥は相変わらず解消されていない（註3）。ネガティブ押型文土器を「中部地方在地の土器型式」とする前提を崩さないかぎり、このギャップは越えられないであろう。「ひとまず立野式を中部地方の押型紋の変遷の圏外におく」（岡本1987）という視点が必要で、立野式についての編年論議は、長野県から本質地である近畿地方へ土俵を移すべきである。この問題を含め、上述したように神村編年の前提となっている神宮寺→大川式の編年序列が逆転が確定した現在（註4）、立野式は根本的な見直しをしなければならない。

立野式土器について筆者は、「立野式はその編年の位置云々より、はたして大川式と切り離して一型式として認定される内容をもっているのかどうか検討されなければならないだろう」と考えたことがあった（中島1986）。大川遺跡2～5次調査報告書（松田1989）が昨年刊行され、大川式の全貌が明らかになった現在、ますますその感を深めている。

岡本東三氏は立野式の研究史を「今日までの立野式に係る動向をみても、その前半期は関東編年を、その後半期は近畿編年を軸に展開し、中部地方独自の視座からその編年が構築されたこと

はないのである」(岡本論文97頁)とまとめる。厳しいが、正鵠を射た指摘である。

3 岡本論文の評価

岡本論文の最大の成果は、「立野式は近畿地方の大川式や神宮寺式に後続する型式でもなく、中部地方の沢式や樋沢式に先行する型式でもない。地域性をもった両系統の発展段階とその交渉過程の中で生成されたのが立野式土器といえよう」(112頁)とする見解を型式学的に論証した点にあると思う。

広地域の土器を扱い、詳細、多岐にわたる岡本論文の正確な評価は、浅学の筆者にとってたいへんに重荷であり、まったく覚束ない。言及が部分的であることを、また理解の及ばない点について御寛恕願う次第です。

(1) 立野式の認定と細分

岡本氏は立野式の型式内容を、神村氏が従来述べてきたところにほぼ揃えて論を展開し、立野式の型式枠の検討を省略する。そして立野式のネガティブ文は大川式に類似し、「施紋構成や口縁部のキザミは神宮寺式に類縁を求めることもできる」(97頁)ことから、大川→神宮寺式の変遷に見合う立野式の二細分を考慮する。ここで注目されるのは、先に立野式特有の文様構成とみた「口頸部縦位、以下横位密接構成」を、樋沢・大川式の異方向構成に対して「施紋方向の逆転」とみて、その成立事情について「東海地方の動向と係っているのかもしれない」(97頁)と指摘される点である。最近、押型文土器研究に関して東海地方の様相が注目されているが(後述)、立野式に関しても中部・近畿地方間だけでなく、東海地方の動向をより深く視野に収めなければならない状況に入りつつあるようである。

立野式の細分については、全体の文様構成が判明する資料が少ないことから、型式学的比較ではなく、大川式(大川遺跡)と神宮寺式(神並遺跡 下村1985)の押型文の文様種別比率を基準として、長野県下の4遺跡(立野、三つ木、赤坂、福沢遺跡)の文様種別比率を照合する方法を採り、その可能性を探る。そして立野、三つ木遺跡の「ネガティブ紋優勢の格子目紋主体型」と、赤坂、福沢遺跡の「山形紋主体型」の二者を認め、前者を大川式に対比し、後者は神宮寺式に直結できる比率を示さないものの、「東海地方の神宮寺式類似の土器に立野式の山形紋が共伴する例が認められることから、山形紋主体型を神宮寺式に対比」(102頁)推定する。

大阪・奈良	三 重	愛知・岐阜	長 野		関 東
大 川(古)	大 鼻	沢	向 陽 台・〔樋沢(古)〕		〔平 坂〕
大 川(新)	〔射原垣内〕	〔馬 場〕	立 野(古)	樋沢(中)	普 門 寺
神 宮 寺	〔上 寺〕	〔荻 平〕	立 野(新)	〔樋沢(新)〕	(+)
大川・神宮寺系押型紋				樋沢・細久保系押型紋	

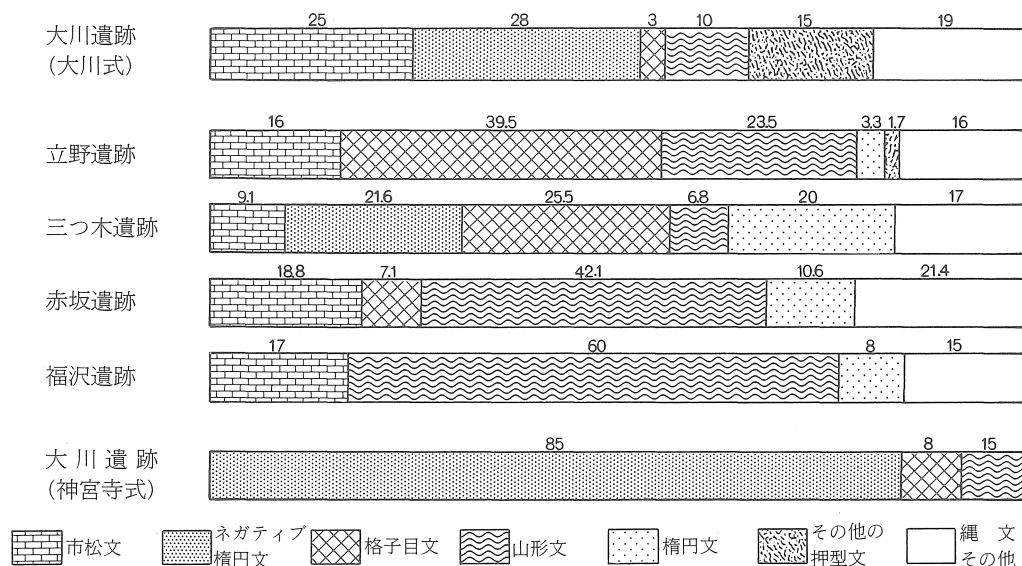
第3図 岡本論文「押型紋土器前半期の編年」〔 〕は遺跡名を示す(岡本1989から転載)

こうした文様種別の「構成比が押型文土器群の型式別区分の基準として普遍的な有効性をもつという仮説は、すでに多くの研究者によって否定されている」(戸沢1978)との指摘もあるが、市松文の有無が大川式、神宮寺式の型式区分のメルクマールになることを考えると、その意義を無とすることはできないであろう。各遺跡の諸情報のバラツキはさておき、着眼する項目によっていくつかの解釈が可能である。主体となる文様比を主眼とする分析は正攻法であるが、大川式に特徴的な市松文が4遺跡でほぼそろって安定し、逆に山形文主体型の赤坂、福沢遺跡がわずかながら優勢であることは、岡本氏の立野式細分案にとってマイナス材料となろう(第4図参照)。また比率がまったく異なる山形文主体型を、いわゆる立野タイプの山形文を介して神宮寺式と対比するのも無理強いと思う。

岡本氏もこの立野式の二細分は「あくまでも大まかな紋様構成の比率をもとにした傾向であり」その「可能性を示唆するにとどめ、将来の型式学的細分にそなえたい」と慎重を期している。論文末の編年表(第3図)にみられる立野式(古)・立野式(新)は、「西の大川式→神宮寺式、東の樋沢(中)式→(新)への二型式の推移に対比できる」「二型式」(112頁)として確固のような印象を受けるが、以上のように、この細分は立野式自体の検討から導き出されたものではなく、樋沢式、大川・神宮寺式の変遷に合わせたもので、立野式(古)・(新)の型式実態については検討未了であることを確認しておきたい。

第4図は岡本論文発表後に刊行された大川遺跡報告書から、岡本論文第5図にならぬ大川遺跡の大川式と神宮寺式の文様別比をまとめたものである(註5)。大川式では市松文とネガティブ楕円文が半数を占め、縄文、刺突文(その他)、山形文、格子目文が次ぐ(註6)。立野、三つ木、赤坂、福沢遺跡と比較すると、市松文の比率がより近づいたこと、縄文の比率がほぼ近似することが指摘できる。神宮寺式は神並遺跡と良く似た比を示している。

結局この表からは、大川式と神宮寺式の差がはっきりと読み取れるほか、立野式の4遺跡の文様



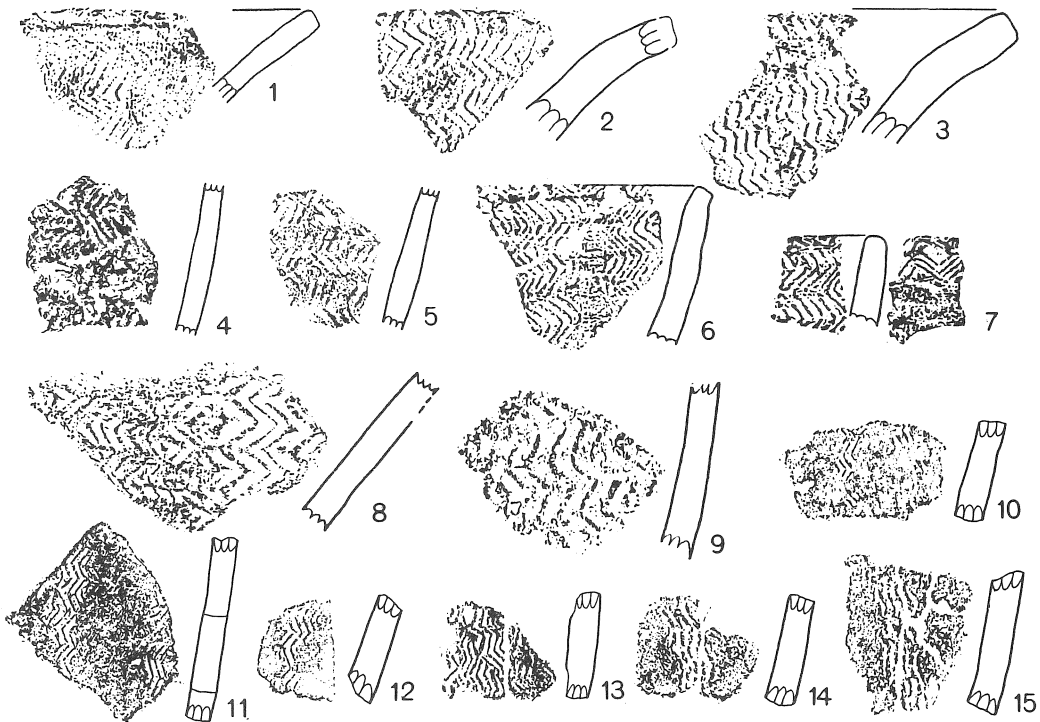
第4図 大川・神宮寺・立野式土器の文様別比(数字は%)

種別比が、大川式とも神宮寺式とも異なっていることを示していよう。するとこの表は立野式が大川・神宮寺式から区別されるべきことを示唆しているのであろうか。

(2) 立野タイプの山形文土器について

「土器面での陽部(凸部)の幅が狭く、陰部(凹部)の幅が広い」(神村1986b)山形文、すなわち原体への刻みが細い山形文(第1図46)は、立野式に特徴的な山形文として「立野タイプ」と通称されている(神村1983a・b)。これに“おおぶりの山形文”(第1図40~43)が加えられることがある。縦位密接構成をとる例が多い。樋沢式前後の山形文の中では、けして多くないが、通常の上形文に対して「一見して差違が明瞭である」(神村1986c)ことから、上述のように神村氏は早くから立野式の特徴として指摘されていた。岡本氏も福沢遺跡(小林1985)のこの種の山形文土器をもって「立野式固有のものであろう」(103頁)と見る。

立野タイプ山形文と通常の上形文との判別は、多分に主観的にならざるをえない面があるが、「原体への刻みが細いこと、器厚が厚いこと」に着目して類例をみると、中部・東海地方のほか大川遺跡(第5図8・9)にも、さらに関東地方でも最近確認され(神奈川県寺谷戸遺跡、第5図10~15、鹿島1988)、相当広範囲に分布することが明らかになりつつある。しかし現在のところ、長野県周辺に多く分布することを見直す程ではないと思うが、静岡県若宮(第5図4・5、馬飼野・伊東1983)・三沢西原(水島1985)・中尾(第5図6・7、平川・広瀬・前嶋1986)遺跡、愛知県萩平D遺跡などの東海地方の類例をみると予断を許されない状況にある。



第5図 立野タイプ山形文土器 (1:下り林、2・3:八窪、4・5:若宮、6・7:中尾、8・9:大川、10~15:寺谷戸)

「立野タイプ」山形文については、「立野式に特徴的なもの」とする見解を越えて、その型式学的意味は問われたことはなかった。岡本論文では立野タイプ山形文の縦位密接構成そのもの及び口縁部内面に山形文が施された土器に東海地方との関連を考慮し、こうした特徴をもつ土器と樋沢式の山形文との共伴例（稲荷沢、福沢遺跡）から、立野式と樋沢式との併行関係をのぞかせる（103頁）。

立野タイプ山形文と樋沢式の通常山形文との差は、原体彫刻にかかるものであるが、製作技術的には一般的な山形文に比べより簡便であろう。この点、沢遺跡の整った山形文に対して、プリミティブと見られなくもない。しかしこれらの山形文のほか、樋沢Ⅱ式期には種々な山形文のバリエーションがあり、立野タイプ山形文もその出自・系譜はともかくとして、樋沢式期の一種とみるのが妥当であろう。事実、立野遺跡にはこの山形文のほか、これらと対称的な原体への刻み幅が広い山形文が認められる（第2図76）。異方向の構成で、岡本論文では立野式からはずして樋沢式に比定されている。

八窪・寺谷戸遺跡には縦位帯状構成をとる立野タイプ山形文土器があり（第5図11ほか）、この種の山形文が樋沢式と親縁あることを良く示している。寺谷戸遺跡例は稲荷台式（新）期の住居跡出土資料であり、樋沢Ⅱ式段階に位置づけられることは確実である。また立野式に比定されている福沢遺跡の縦位密接山形文土器（第6図1）と瓜ふたつの大川遺跡の土器（第6図6）は、「普門寺式」と同じ構成をとり、これも樋沢Ⅱ式に対比されるべき特徴をもっている。先に見た立野タイプ山形文の分布域もまったく樋沢式の範囲内にあることを考え併せると、この山形文は樋沢Ⅱ式に包括されそうであるが、「一見して差違が明瞭である」ほど非樋沢式的な様相から、その認定を躊躇する。岡本氏が指摘するように縦位密接構成が盛行する東海地方とも関係が深そうであり、その帰属については保留したい。いずれにしろ中部・東海・近畿地方を結ぶ三角地帯にある山形文のバリエーションの一種と把握され、樋沢Ⅱ式がからむ位置にあるだろう。

岡本論文では大川式における山形文の出現について、「樋沢式との交渉の結果」（108頁）もたらされたと考察する。樋沢式と大川式の編年併行は双方の型式内に見られる証拠から、既に岡本氏の指摘するところであり（岡本1987）、本論でも再説されている。筆者も大川式の頸部刺突文と細久保遺跡2類a群土器（樋沢Ⅱ式）との比較、検討から同様の結果を得ている（註7）。岡本論文では「地域性をもった両系統の発展段階とその交渉過程の中で生成されたのが立野式といえよう」（前掲）とする結論から、逆に「中部地方における立野式の存在そのものが、（樋沢・細久保系押型紋と一筆者註）大川・神宮寺系押型紋との同時存在を証明している」（112頁）ともみる。

大川遺跡の立野タイプ山形文の存在（第5図8・9）は、立野式の「ネガティブ紋の系譜が大川・神宮寺式に求めることのできる型式学的な理由は、大川・神宮寺式には、立野式に特有の山形紋がないこと、それに楕円紋を有しないことの二点につきるであろう」（97頁）とする見解に、いささか抗するように思えるが、これも大川式内にみられる樋沢式的要素として、両系列の交渉を示す証左のひとつに加えたい。

ところで岡本氏は、大川式の山形文に関連して、数年来論議をよんだ「大鼻式」（山田1988）を、提唱者の山田猛氏とは別な視点——「大鼻遺跡の土器群は一つの型式として設定すべき内容をもつ

ている。その理由は、表裏縄文の土器の存在でもなく、口頸部の屈曲度でもなく、山形紋がないという点である」(107頁)——から積極的に評価する。「大鼻式」を「時間的意味合いにおいては大川式の範疇」におさえとしながらも、山形文がないことから大川式以前、すなわち大川式が樋沢式と接触、交渉をもつ前段階に編年される型式として、足早に認定に向うのである。型式間の文様種の有無は型式学的検討に重要な意味を持ち、有効であることは言うまでもないが、「無い」ことに注目する視点は、一例の資料の出現で覆る危険をはらむ。「不安定な分布論」にも似て、『考古資料が豊富に「在る」ことに依存する議論は安心であって、「無い」現状に寄りかかった議論は不安である」(佐原1985)。

本論文で強調される「沢式には楕円紋がなく、樋沢式には楕円紋が共伴する」(111頁)ことは、沢遺跡報告以来20余年にわたり安泰であり、向陽台遺跡(小林・会田1988)で追証済みとも言えるが、こと「大鼻式」に関してはまったく危険である。松田真一氏の大川遺跡報告で明らかにされたように、大鼻遺跡の押型文土器は大川式に属するもので、単に山形文が欠落している公算が強く、山形文を「欠く」組成とは断言できないのである。『「大鼻式」は大川式のうち縄を併用する一群の土器と同時期に対比すべきものであろう。時間的意味合いにおいては大川式の範疇ともいえるが』(107頁)と松田氏の見解を支持するならば、仮に樋沢式と交渉をもつ以前の段階が大川式のうちに弁別される場合、それは当然大川式の細分で対応すべきである。

(3) 楕円文の出自について

「楕円文の出自」の項は、押型原体論から、立野式と樋沢式の時期的併存という本論文の結論を導き出す重要な論証箇所となっている。すなわち樋沢式の楕円文は、大川系列ネガティブ文の影響によって「ネガティブ紋の半転現象」として出現した立野式の縦刻原体楕円文を、樋沢式に「伝統的な横刻原体に変容」させて出現したものと考察する。例示された赤坂、三つ木、稲荷沢遺跡の縦刻原体の楕円文が縦位に施文された土器は、大川系列押型文土器にはみられないものであるが、樋沢式とは明らかに異なる器形、器厚、口唇部の刻みは、大川式に大きく傾斜することも明らかである。これらのポジティブ楕円文土器は、赤坂遺跡のネガティブ楕円文土器(第8図7)とは、まったくポジとネガの差だけである。両者の間に「立野式」を介在させなくとも樋沢系列圏における容易な変換との理解も可能であろう。

ネガとポジの差は原体論からは大きな落差と認めないわけにはいかないが、文様レベルでは両者はあまりに近く、ポジティブ楕円文を他の大川式に属するネガティブ文から分離して別型式(立野式)と認定するのは適当でないだろう。

(4) 立野式の層位的事例について

立野式が樋沢式に先行する型式であることを示す層位的事実は、神村氏の立野遺跡報告で、既に示唆されていた。立野式と樋沢式との間の文様構成等、型式属性のギャップが越え難いこともあって層位的事实在が強調されることが多い。

岡本論文では立野遺跡のほか、立野式→樋沢式の編年序列を示す層位例として報告されている樋沢、栃原岩陰、林頭、福沢遺跡を検証する。そして各遺跡例とも「いずれも“層位的事実”と主張できるほどの事実ではないように思える」(111頁)と括る。筆者も立野、栃原岩陰遺跡の層位と土

器の関係について分析したことがあるが、同じ結果を得ている（中島1987a・1989b）。樋沢遺跡代1次調査のDトレンチにおける樋沢式→細久保式の移行を示す層位的成果も、その後の調査で事実ではなかったことが判明しているが（中島1989a）、この場合、型式学的検討がこの変遷を補っていた。このため細部に問題を残しながらもその序列は不動であるが、立野式を中部地方最古に位置づける編年観は、型式学的にも破綻寸前にあり、層位論的にもまったく実証されていないのである。

以上の5遺跡のほか、神村氏が注目していた八窪遺跡の層位的事例（神村1986a・c）も、その後刊行された報告書（近藤1987）では言及されていない。これらの“層位的所見”は関係者にとって“事実”であっても「学史的には事実ではなかったという事例」（91頁）のひとつひとつとして埋まっていくであろう。

樋沢遺跡の層位と土器について付言したい。

小林康男氏は「立野式→樋沢式という時間的順列が把握されたものとする」（小林1985）が、そうではなくて樋沢式と大川式との関係を顕現する遺跡例として重要と考えるからである。

本遺跡の層位と出土土器との関係は、下位の層から立野タイプ、上位の層から樋沢タイプの押型文土器が出土するという傾向はまったく認められず、V・VI上・VI下・VIIの各層に縦位・横位帯状、縦位密接の山形文が主体となり、市松文、楕円文があり、VI下層を除いた各層にネガティブ楕円文が存在することが先ず注目されるのである。この出土傾向と大ぶりの山形文の縦位密接施文土器（第6図1）がVI上・VI下・VIIの3層から出土し、接合されることを考え併せると、福沢遺跡V～VII層



第6図 福沢遺跡（1～4）、大川遺跡（6～11）の押型文土器（5は八窪遺跡）

の押型文土器はV層の1片の細久保式土器を除き、ほぼ同一段階（樋沢Ⅱ式）と見なすことができるのである。

実測図に示された立野式に比定されているネガティブ楕円文土器（第6図2）・大ぶりの山形文土器（第6図1—同図6の大川遺跡住居跡2出土の土器に酷似する）は、横位帯状の樋沢Ⅱ式（第6図3）、平坂式にちかい無文土器（第6図4）と同時期と考えるべきである。

このネガティブ楕円文土器を大川式と認定すると、福沢遺跡の層位について「樋沢式と立野式が共存する資料ではないかとも考えられる」（111頁）とする岡本氏の見解を支持する結果となる。

（5） 樋沢式の細分について

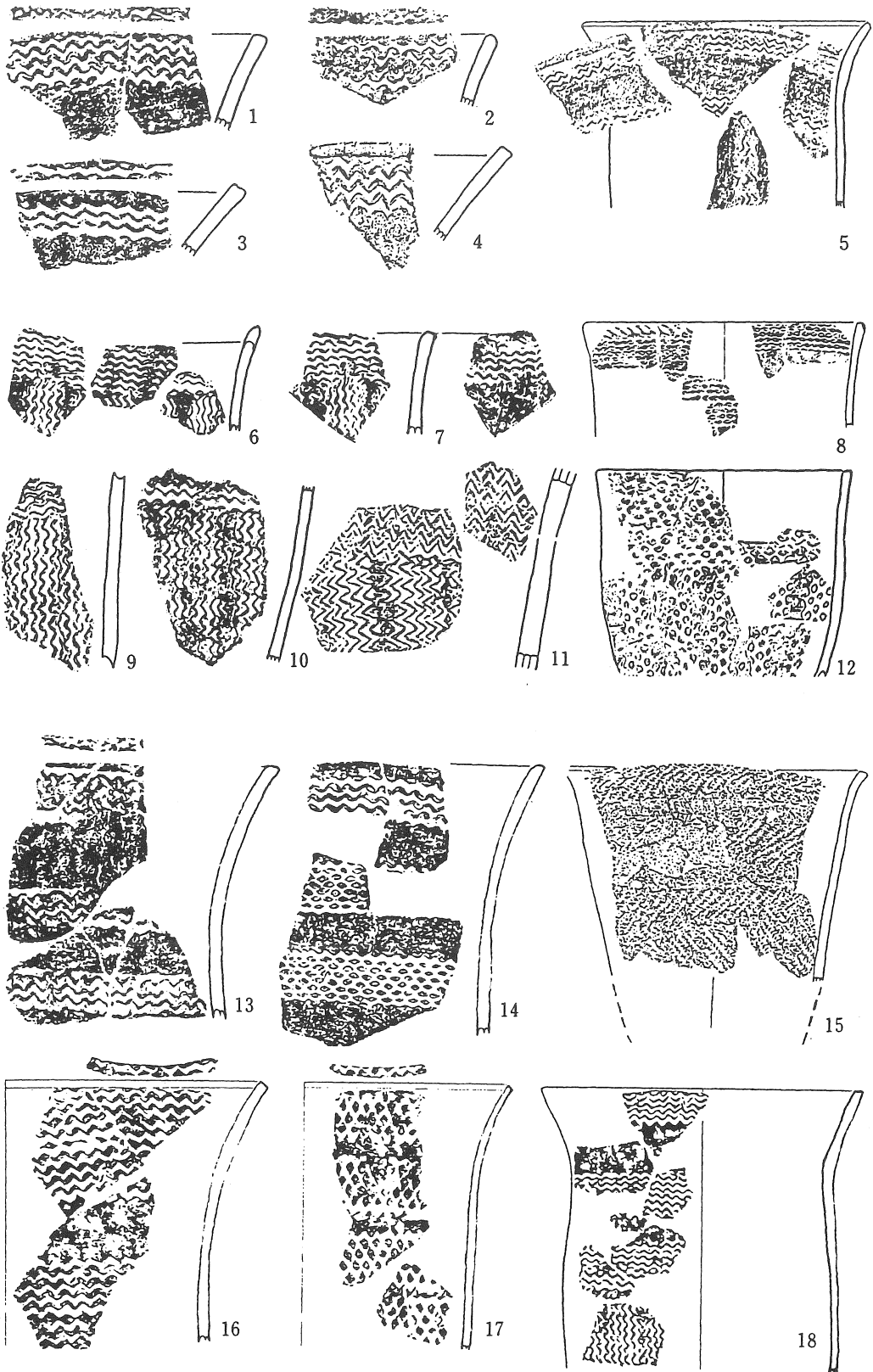
岡本氏は樋沢式を「沢式に対比すべき段階（古）」、「帯状施紋の原体が長くなり、密接施紋の傾向に従って、口頸部の横帯の幅が縮小する段階（中）」、「再び口頸部の文様帯が長くなり、多帯化する段階（新）」（111～112頁）に3細分する（第7図）。

沢、向陽台遺跡の土器群と樋沢式（中）・（新）とは、黒鉛を含む胎土、施文原体の長短のほか文様構成に大きな差があり、時間差をもって型式区分されることは明瞭である。したがって、樋沢遺跡の押型文土器の三細分ならともかく、樋沢式土器の細分であるならば「沢式に対比すべき段階（古）」は、沢式として広義の樋沢式からははずすべきである。沢式を樋沢式の地方型式とみたり、樋沢式に対して「地域性の強い分派型式の一つ」（可児1989）として、沢・樋沢式を同時期とする編年観が根強い現状で、沢式を広義の樋沢式に含めると、沢式の編年位置についてのこうした誤認を助長しかねない。樋沢式（古）は編年表では括弧付となっているが、向陽台遺跡の土器群を「向陽台式とでも言うべき長野県の沢式段階のものである」（111頁）ことから「向陽台式」と沢式と別型式名として編年表に掲げるのも混乱の一因となろう。

ここで沢式を樋沢Ⅰ式とする私の論点（中島1986・1987a・1988b）を再説させていただきたい。佐藤達夫氏の沢遺跡調査予報（大野・佐藤1967）には、沢遺跡の押型文土器を一型式として提唱するにあたり、資料の詳細、精緻な観察、分析を経て、関東・中部・東海・近畿地方の土器群を整えられており、まさに「押型紋研究の基本となる内容が凝縮されている」（関野1988）ことは、私も深く認識しているつもりである。佐藤氏の押型文土器について論文がその後なかったため、「型式提唱者の発言を順を追って吟味する」（大塚1989）ことはできないが、筆者が沢式を樋沢Ⅰ式と固執するのは佐藤氏の沢予報における次の一節に着目するからである。

「沢の土器に最も近似する纏まった資料は樋沢下層の土器であろう。しかし樋沢下層は楕円押型紋を含み、また全面に施紋するものがあるから、沢以降に位置づけなければなるまい」

すなわち佐藤氏は、樋沢遺跡第2黒土層下層の土器群のうちに、復原図に示され「青磁のような色沢をもつ極薄の土器」（戸沢1955）と戸沢氏が特筆していた沢と同等の土器を見出しながら、これを他の山形文、楕円文とともに後出するものと扱われていたのである。樋沢下層の土器群の中で、沢式相当の山形文土器は資料数は少ないものの、戸沢氏が「帯状施文、特に直交する異方向の施文を特徴」として設定した「樋沢式」（第一類押型文土器）のなかでは中核となった土器群である。神村透氏は、樋沢遺跡の黒鉛入土器が、沢遺跡報告以前に「樋沢式土器のメルクマールの一つになっていた」ことを記されている（神村1982）。たしかにこの最古段階の押型文土器は、沢遺跡の土器に



第7図 岡本氏の樋沢式土器の細分〔1～5：樋沢式(古)、6～12：樋沢式(中)、13～18：樋沢式(新)〕(岡本1989から転載)

代表させた方が土器相はわかりやすい。しかし樋沢遺跡の調査・報告は、現在の押型文土器研究の原点であり、この樋沢式に沢式が含まれていたのである。樋沢式の新旧を沢遺跡の土器群が明らかにしたと考えるべきであろう。こうした事由により筆者は、押型文土器の最古型式に相当する沢式を、樋沢式の細分でおさえ、樋沢Ⅰ式と呼称している。

樋沢式(中)・(新)は筆者の樋沢Ⅱ式に相当するが、この段階は関東地方の編年網に照らすと、稻荷台式から初期沈線文にかかる位置にあり(註8)、樋沢Ⅱ式が関東地方のおよそ4土器型式に相当する時期を担当している。押型文土器型式の移行が中部地方で急行で、関東地方で鈍行であったとは考えられず、樋沢Ⅱ式はさらに細別段階が見極められなければならない。岡本氏の樋沢式(中)・(新)の細分はその第一歩となるが、両段階の土器群の無文部の在り方を注視すると、帯状施文から全面施文へという樋沢・細久保式の文様構成上の変遷原則に背く部分がある。この樋沢式(中)・(新)段階、すなわち従来の樋沢式には、樋沢遺跡(第7図13、14)や、本論文で大川式土器との関連が問われた反目南遺跡(会田1988a)例のように、無文部が顕著な典型的な帯状構成のほか、異方向ながら縦位密接施文され、帯状の効果の薄い土器群が混沌としている。こうした土器相の背景には、岡本氏が立野式の「山形紋の出自」の項で注目するように、若宮遺跡に卓越する密接構成の動向に注意しなければならないが(後述)、やはり全面施文を原則とする大川式との交渉が大きかったであろう。

「樋沢下層・御座岩等に見られるごとく、この時期に生じる全面施紋への変化はおそらく大川式の影響によるものでしょう」とする「沢遺跡調査予報」における佐藤達夫氏の慧眼が想起される。

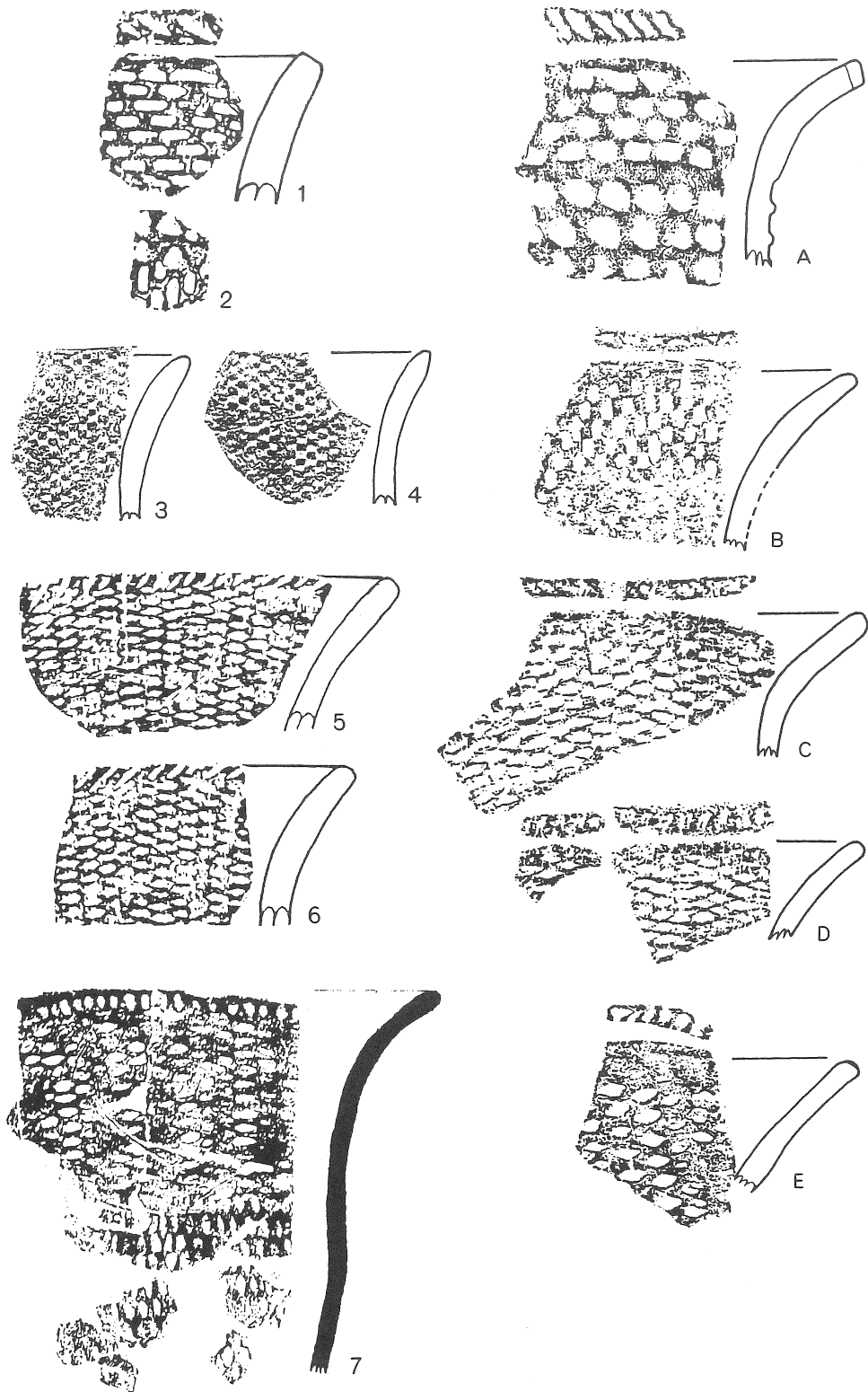
樋沢式(新)には従来の細久保式(細久保遺跡1類)が含まれている。この細久保遺跡1類は、松沢亜生氏の細久保遺跡報告(松沢1957)で樋沢式とはされなかったものの、「樋沢式に類似する」土器(松沢1983)とされてきたものであり、樋沢式(新)として樋沢遺跡の土器と並べられても共通する文様構成からさほど違和感はない。狭義の樋沢式を(中)段階とするが、すると従来の細久保式土器を含む樋沢式(新)は、どちらの型式大枠入るのであろうか。岡本氏は「樋沢式(新)を樋沢式の範疇に含めるのか、あるいは細久保式の範疇として位置づけるかは、細久保式の規定とも係る重要な問題であり、議論を要しよう」(112頁)とその決定を保留された。重要な問題だけに決着をつけて欲しかった。

(6) 大川式か立野式か

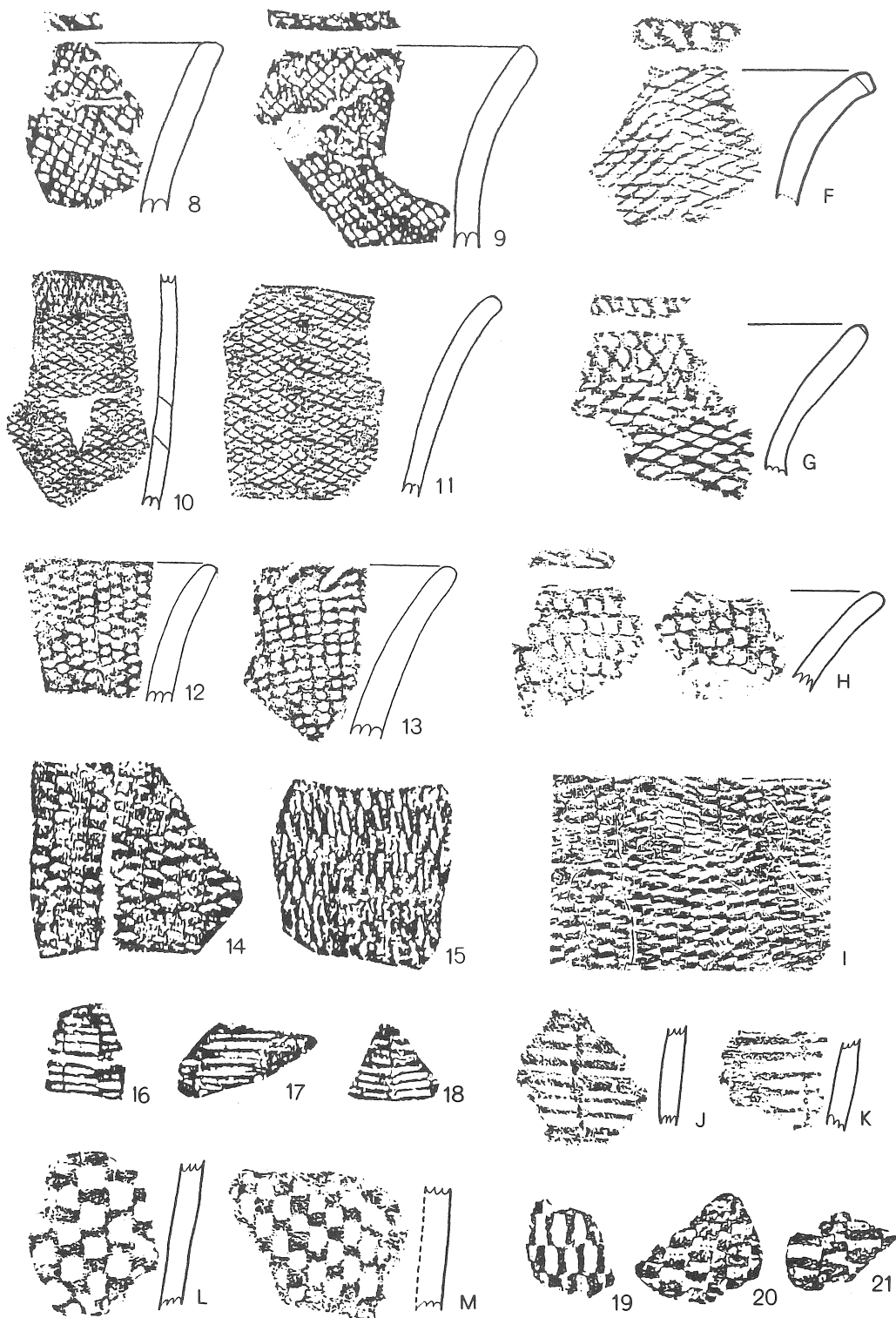
立野式は「近畿地方の大川・神宮寺系押型紋の分派型式であることは明白」(113頁)であろうか。

立野式の市松文・ネガティブ楕円文・格子目文は大川系列押型文土器(大川式)とは器形、口唇部の形状、口唇上の刻み、器厚、施文原体等の酷似から区分不可能であろう。立野、林頭、二本木、稻荷沢、石子原、栃原岩陰遺跡等のこの種の押型文土器は、すべて容易に大川遺跡に対比、比定可能であり(第8、9図)、大川式そのものと認定されよう。もちろんこの対比からはずれる土器も存在する。上述のように岡本氏が「施紋方向の逆転」とした口頸部縦位、以下横位の文様構成、そして縦刻原体による楕円文は、大川式と立野式とされる土器とを分ける大きな要素である。また、立野タイプ山形文も樋沢Ⅱ式にちかいものの、現状ではすべてを同式に包括することは不可能であった。

立野式に特有の口頸部縦位、以下横位の文様構成については、今後、大川式内の類例で解消され



第8図 立野式と大川式の比較(1) (1・2：稲荷沢、3・4：三つ木、5・6：二本木、7：赤坂
A～E：大川)

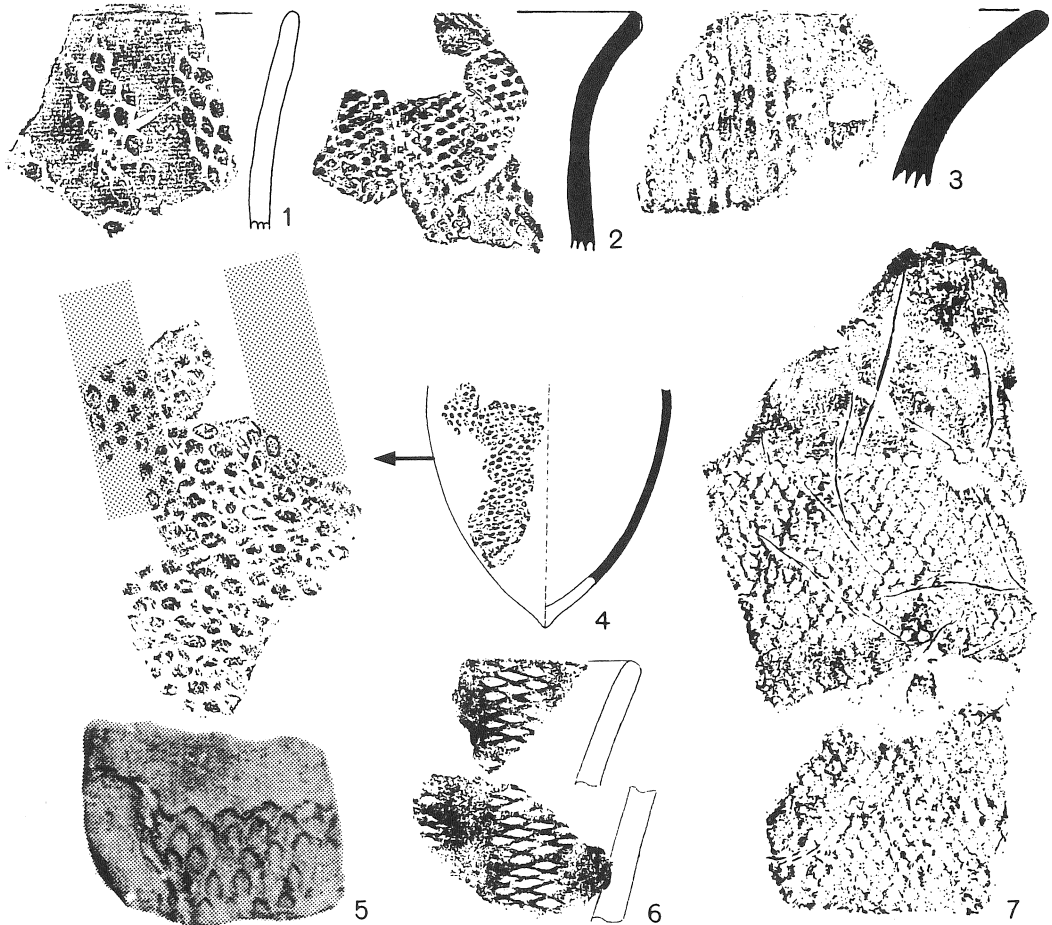


第9図 立野式と大川式の比較(2) (8・9・14~18:立野、10・11:栃原岩陰、12・13:林頭、19~21:二本木、F~M:大川)

る見込みもあるが、この文様構成が大川式内にみられない現状では、樋沢式の異方向構成の伝統にからむ一群の土器と把握した方がよいだろう。菅平東組遺跡には口頸部縦帯が斜走しながらも帯状施文され、胴上部に横帯をもつ土器（第10図1）があり（註9）、樋沢式内の口頸部縦位、以下横位施文の資料として注目したい。細久保遺跡3類にも同種の構成をとるとされる楕円文土器（第10図4）があり、どうもこの構成は樋沢式の雰囲気強い。

後者の縦刻楕円文については、大川式のネガティブ文を樋沢ナイズしてポジティブな押型文としたと理解することができるだろう。

樋沢式と大川式との交渉は比較的頻繁であつたらしく、器形、文様要素、文様構成等の共有、交換がみられる。交換にあたっては変容が伴なう。上述の立野式と大川式間の二点の相違解消の理解は、遠くはずれているとは思わないが、前者についてはかなり苦しい。二点の相違は、両型式間に普遍するものではなくごく一部に見られるに過ぎず、またけして両者を決定づける程のものでもない。故地の流儀の全うするのではなく、一部を現地のならわしに合わせた変容とみるほうがスムー



第10図 楕円文土器とネガティブ文土器（1：菅平東組〈縮尺1/2〉、2：赤坂、3：石子原、4：細久保、5：駒ヶ根養命酒、6：棚畑、7：林頭）

ずな理解となろう。文様構成を問わず全面施文を原則とするネガティブ文が、無文部をはさんだ樋沢流の構成をとる養命酒駒ヶ根工場用地内(第10図5、友野・小池1974)、棚畑(第10図6、宮坂1971)遺跡の土器は、このことを具現している。

大川遺跡のネガティブ文土器に、樋沢式の山形文が施された有名な併施文土器(第6図7)は、帯状施文といっても樋沢式にはありえない縦帯に変容されているし、また山形文が横位帯状施文された土器(大川遺跡Ⅲ類、第6図9)も、口唇部内側に大川式流の刻みが加えられていた。大川式圏内におけるこれらの土器は、樋沢式、大川式の同時性を如実に物語っているが、これを大川式、樋沢式からはずして別型式とするのは、分布論上ひいては文化動態の追及に著しい弊害をもたらすことになる。

「立野式」土器は中部地方に波及した大川式土器そのものと理解されなければならない。

岡本論文を読み終えて、「立野式」の格子目文土器について深く言及されていない点が気にのこる。立野式の縦刻原体楕円文の出自に関連して、「このほかに(大川・神宮寺式のネガティブ文の変化―筆者註)楕円紋の出自は格子目の変化あるいは山形紋の変化によることも想定できるが、樋沢・細久保系押型紋にその出自を示す積極的な要因はないように思える」(114頁註14)と述べるだけである。

立野式を古く位置づける編年観をとる立場にとって、栃原岩陰遺跡深部出土等の立野式とされてきた格子目文土器は、「層位」と関連し大きな根拠となっていたはずである。

「栃原遺跡の資料では下層より格子目が多くですが、それを直ちに立野式といえるかどうかは疑問だ」とする岡本氏の発言(註10)の真意を知りたかった。

前稿(岡本1980)で神宮寺・大川式土器を樋沢式併行とした論拠のひとつとして、沢式の「格子目文縦刻原体」があり、樋沢・立野・大川式の格子目文は当然論点となるべきではなかったのか。

4 東海地方における押型文土器の動向

最近の押型文土器研究で、東海地方の動向がにわかに脚光を浴びつつある。岡本論文では、立野式に特徴的とされてきた口頸部縦、胴部を横位に施文する文様構成の成立について東海地方の動向に注目し、またこれと関連し、非樋沢的な山形文の縦位密接構成、稲荷沢・福沢遺跡の口縁部内面に山形文が施文される類についても東海地方との関連を考慮する。可児通宏氏は最古段階の押型文土器の中心地として、中部地方よりも東海地方をにらむ(可児1989)。

両氏のこの視点の中心には静岡県若宮遺跡の押型文土器がある(馬飼野・伊藤1983)。若宮遺跡では樋沢式と認定される土器は少なく、多量の縦位密接施文された山形文・格子目文と表裏縄文、擦糸文土器が特徴的である。主体となる縦位密接施文の土器は、樋沢Ⅱ式の同構成の土器とは異なるようで、樋沢・細久保式の変遷観では計りきれそうにない様相を呈している。

このことから「東海地方では、沢式や樋沢式とは別の展開があった」(可児1989)という視点はなかなかのものである。若宮遺跡をはじめ、三沢西原、中尾遺跡などにみられる縦位密接型を樋沢、大川両系列押型文土器分から分離して、東海地方のまとまりとして把握することができそうであるが、

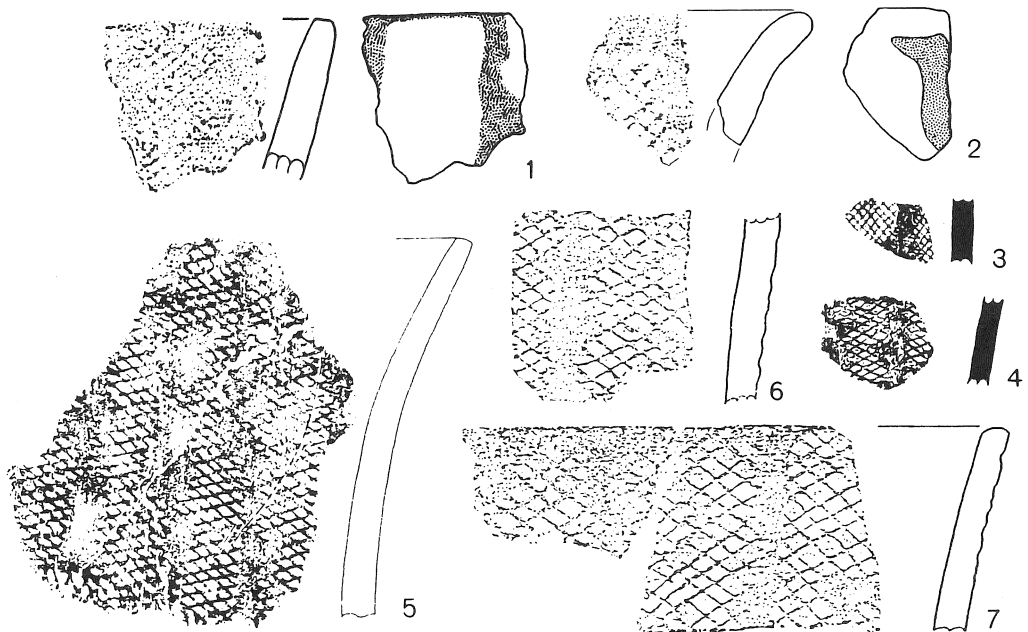
一方で大谷津、山王前遺跡のように、同様の山形文で横位密接が勝る遺跡もあり、その認定は慎重にならざるを得ない。

若宮遺跡の格子目文と中部地方の格子目文（立野式とされてきた格子目文を含めて）の類似は否定できないであろう（註11）。両者の関係を探る糸口として戸沢氏の樋沢報告で「文様は器面全体に施されているが、それをすり消したような不規則な無文部が多い」と指摘されてきた格子目文土器（第11図）に注目したい（註12）。筆者はかつてこの種の土器について、「HD類—格子目文のうち縦位に磨り消したような無文部をもつもの」と分類し、無文部の存在から樋沢式への傾斜を考えたが、樋沢式とは器厚・器形に差があり、樋沢Ⅰ式からの自律的な展開になるものとは考え難く、その扱いに苦慮した（中島1987a）。樋沢式の文様構成上の約束に従う土器であるなら、山形文にみられるように、無文部を残して施文する例が密接して施文される例に勝るはずであり、また、異方向の構成が存在するはずである。全面施文したのち何故わざわざ磨り消されなければならないのであろうか。

類例は樋沢、赤坂、向山、棚畑、御座岩、下り林、八窪、頭殿沢遺跡等、長野県下にまとまる。

下り林遺跡には縦位磨消の例のほか、横位に磨消された例があり（註13）、HD類は明らかに樋沢式の帯状構成の傘下にある土器と認められるだろう。

HD類のベースとなる格子目文と同種のものは、大川式には少なく、若宮遺跡に卓越することを勘案すると、HD類は東海地方の全面施文を原則とする格子目文土器が、樋沢式の文様構成を擬して、すなわち樋沢ナイズされて樋沢式の組成の一員に加えられたと考察できるであろう。HD類を介して、樋沢Ⅱ式と若宮遺跡で主体となる縦位密接構成をとる土器群との時期的併行が導きだされるのである。このことは同遺跡の樋沢Ⅱ式に比定される帯状構成の山形文・縄文の土器が示唆してい



第11図 格子目文（HD類）土器（1：下り林、2：八窪、3：樋沢、4：頭殿沢、5：棚畑、6・7：向山）

たのであるが、調査所見では否定的である（註14）。

先の立野タイプ山形文にもHD類に相当する無文部をもつ例（註15）があり、これに着目すると立野タイプ山形文も、HD類と同様の解釈が可能となる。

しかし以上は、東海地方でも突出した在り方を示す若宮遺跡を主軸とした考え方であり、今後若宮遺跡の土器相を耕す遺跡例をもって追証したい。

ともあれ樋沢Ⅱ式は大川系列だけでなく、東海地方とも型式属性を変容する程の親密な交渉があったことを確認しておこう。

5 結 語

岡本論文の多くの箇所にも共鳴しながらも、岡本氏が立野式の既存の型式枠の再検討を省略して論を進めている点、そして立野式は「大川・神宮寺系押型紋の分派型式」（113頁）であると帰結する点、賛意を表し難い。

「3 立野式土器のゆくえを追って」の章で掲載する数書の編年表（94・95頁）に「立野式」が浮沈し、そして消えたのは、「立野式の分析からその位置づけを行うことを放棄したことにほかならない」（96頁）が、現在まで編年上ペンディングであり続けた原因は、立野式が型式学的に未整備な「型式」であったことにほかならない。とすれば、既存の立野式が一型式として成立するのかわか、中部地方在地の土器型式として成立するのかわか、先ず再検討されなければならなかったのではないか。

立野式土器は、近畿地方を分布主体域とする大川系列押型文土器（大川式）及び東海地方に分布主体をもつと考えられる縦位密接を特徴とする押型文土器（格子目文・山形文）が中部地方に波及した土器群であろう。その出現、展開時期は樋沢Ⅱ式期ないしはそれ以降である。

従来の研究で立野式は、樋沢Ⅱ式とは時期差、型式差を前提として数遺跡の“層位的傾向”でとらえられてきたが、樋沢Ⅱ式に伴出する客体土器としてこそ把握されるのである。客体土器の故地、来歴が不明であれば、在地の主体土器と別型式に区分することは正しい。ただその身元が判明したなら、当然本来地の土器型式に括るべきであろう。「普門寺式」土器しかり。地域を異にして分布する同一型式土器を、地域ごとに別型式に設定するのは妥当でない。

以上が岡本論文を離れた筆者の「立野式土器」についての見解である。

本稿をまとめるにあたり岡本論文からは、前稿（神宮寺・大川式押型紋土器について—その回転施紋具を中心に—「藤井祐介君追悼記念考古学論叢」）に続いて多くを啓発され、その成果を参考、引用させていただいた。筆者の読み込み不足、曲解をひたすらおそれる次第です。また上野佳也氏には菅平東組遺跡の資料を、宮坂光昭氏には細久保遺跡の資料掲載を御快諾いただき、御教示を賜わった。そして資料調査にあたっては会田進、秋本真澄、石井寛、太田直樹、大塚達朗、可児通宏、気賀沢進、渋谷昌彦、瀬川裕一郎、関野哲夫、武井則孝、谷口康浩、原川雄二、原田昌幸、平川昭夫、和田長治の諸氏からは様々な御援助、御教示をいただいた。厚くお礼申し上げます。

(1990.2.26)

〈註〉

- 註1 縄文が縦位帯状施文された横山遺跡の土器について、筆者はかつて樋沢Ⅰ式としたが（中島1987a）、ここに訂正する。
- 註2 口唇部の山形文を、押型文による施文ではないとする見解もある。「棒状施文具で山形沈線を施した土器」（宮下1988）、「山形の押引文」（宮崎・金子1989）とみるのは不自然である。
- 註3 神村透氏は、『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』（戸沢1987）に寄せた「立野式と樋沢式のへだたり」と題するコメントで、「立野式と樋沢式のへだたりは大きく、系統論や文様発展論では説明できない溝をもっている」（211頁）と述べられている。
- 註4 矢野健一氏の研究成果に依る（矢野1984は未見）、矢野1988）。大川遺跡の資料をまとめた松田真一もこの編年序列を支持している（松田1989）。また近畿、中部地方の押型文土器について独自の編年観をもつ山田猛氏の案（山田1988）も、大川・神宮寺式の序列に関しては共通する。
- 註5 立野・三つ木・赤坂・福沢遺跡のデータは岡本論文第5図によった。大川遺跡の大川式と神宮寺式については「大川遺跡」（松田1989）の松田氏による大川式（大川Ⅰ類）、神宮寺式（大川Ⅱ類1・2・4・5、Ⅳ類1・2）の分類に従い、器形・文様構成から両式の区分が明瞭、確実な資料を基準とした。このため分析資料は大川式146点、神宮寺式80点と少なく、大川遺跡の大川式土器の約5%、神宮寺式の約4%にすぎないことを明示する。一資料に二種以上の文様が施文された土器についてはそれぞれの種別にカウントした。したがって文様別のデータ総数は大川式239点、神宮寺式85点である。
- 註6 大川式の「その他の押型文」（15%）の内訳は刺突文13%、平行線文2%である。
- 註7 細久保遺跡2類a群に分類されていた押型文間に刺突文、沈線文などが施された土器群（樋沢Ⅱ式）の祖源を大川式に求め、大川式と樋沢Ⅱ式との編年併行を考察した（中島1990「細久保遺跡2類a群土器についての覚書」）。
- 註8 筆者は樋沢式の編年位置について、関東地方における擦糸文期の住居跡内伴出例及び押型文土器の文様構成をとる沈線文系土器の検討から、「樋沢Ⅰ式から樋沢Ⅱ式、樋沢Ⅱ式から細久保式土器への移行は、それぞれ稻荷台式、三戸式の頃に成った」（中島1988b）と考えている。
- 註9 上野佳也先生の御好意により実見させていただいた。楕円文は3条2単位、原体長15mm、縦、横帯の施文順不詳。
- 註10 昭和56年夏、長野県岡谷市で開催された「樋沢遺跡研究会」での発言。ただし引用文は三上徹也・中居由江氏による（戸沢・山田1982）。
- 註11 大川式の格子目文にはバリエーションがあるが、ここでの比較は松田氏の文様分類のうち「格子目文4」（松田1989）、神宮寺式の矢野氏分類「格子目文B2・B3類」（矢野1988）によっている。
- 註12 HD類の磨消については山田猛氏も注目するところである。同氏は「体部文様をナデ消して、縦位の帯状施文的文様効果をもたせる例」を「立野b式」と仮称し、「後続する樋沢式一脈通じるもの」みる（山田1988）。
- 註13 下り林遺跡報告書（近藤1987）、図26—17・19ほか
- 註14 若宮遺跡の「調査総括」では『帯状施文押型文土器が、密接施文押型文土器に後出するという「時期差」として理解するのが妥当である』という見解が述べられている（馬飼野・伊藤1983）。
- 註15 八窪遺跡報告書（近藤1988）、図17—200ほか

挿図の出典

第1・2図：神村1983d、第3図：岡本1989、第5図：近藤1987・1988、馬飼野・伊藤1983、平川・広瀬・前嶋1986、松田1989、鹿島1988、第6図：小林1985、松田1989、第7図：岡本1989、第8図：神村1983b・d、林1983a、遮那1973、松田1989、第9図：神村1983a・b・d、西沢1982、松田1989、第10図：遮那1973、神村1983a・c、松沢1983、八幡1972、宮坂1971、第11図：近藤1987・1988、会田1983、宮坂1971・1986、友野1983

参考・引用文献

会田 進 1983 「樋沢遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（三）

- 1988 a 「縄文時代早期遺物集中地点」『反目南遺跡』67～76頁 駒ヶ根市教育委員会
- 1988 b 「中部山岳地方押型文文化の様相」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—』
帝塚山考古学研究所
- 大塚達朗 1989 「加曾利B式三細別に於ける齟齬の解消—学史的な理解とは何か—」『先史考古学研究』第2号
- 大野政雄・佐藤達夫 1967 「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』第53巻第2号
- 大参義一・浅野清春・岩野見司・安達厚三 1965 「北替地遺跡発掘調査報告」『いちのみや考古』No.6
- 岡本東三 1980 「神宮寺・大川式押型紋土器について—その回転施紋具を中心に」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』
- 1987 「押型紋土器」『季刊考古学』第21号
- 1989 「立野式土器の出自とその系統をめぐって」『先史考古学研究』第2号
- 鹿島保宏 1988 『寺谷戸遺跡』 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 片岡 肇 1972 「神宮寺式土器の再検討」『考古学ジャーナル』No.72
- 1980 「樋沢式土器の再検討—長野・岐阜両県を中心として—」『信濃』第32巻第4号
- 1982 「押型文土器」『縄文文化の研究』3
- 可児通宏 1969 「押型文土器の変遷過程」『考古学雑誌』第55巻第2号
- 1989 「押型文系土器様式」『縄文土器大観』
- 神村 透 1969 a 「立野式土器の編年の位置について〈三〉—（その2）戦後の学史の中で—」『信濃』第21巻第3号
- 1969 b 「立野式土器の編年の位置について（七）—（その1）立野式土器の登場—」『信濃』第21巻第9号
- 1982 「立野式土器の編年の位置について（完）—（その5）最近の押型文土器研究の中で—」『信濃』第34巻第2号
- 1983 a 「林頭遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（三）
- 1983 b 「二本木遺跡・稲荷沢遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（三）
- 1983 c 「石子原遺跡・石子原古墳」『長野県史』考古資料編全一卷（三）
- 1983 d 「立野遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（三）
- 1986 a 「信濃の押型文土器とその文化—縄文文化の確立期を語る—」『歴史手帖』第14巻2号
- 1986 b 『開田高原大原遺跡』 開田村教育委員会
- 1986 c 「押型文土器—長野県の遺跡から—」『考古学ジャーナル』No.267
- 小杉 康 1987 「樋沢遺跡押型文土器群の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会
- 小林康男 1985 『堂の前・福沢・青木沢』 塩尻市教育委員会
- 小林康男・会田 進 1988 「向陽台遺跡」『一般国道20号線（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 塩尻市教育委員会
- 小松 虔 1976 「栃原岩陰遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』27
- 近藤尚義 1987 「下り林遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』長野県教育委員会
- 1988 「八窪遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』長野県教育委員会
- 酒井幸則 1983 「増野川子石遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（三）
- 佐原 眞 1985 「分布論」『日本考古学1 研究の方法』
- 渋谷昌彦 1988 『山王前遺跡』 島田市教育委員会
- 下村晴文 1985 「神並遺跡の押型文土器」『紀要I』 財団法人東大阪市文化財協会
- 遮那藤麻呂 1973 「上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構」『長野県考古学会誌』16
- 関野哲夫 1988 「東海地方における押型紋段階の様相」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—』帝塚山考古学研究所

- 芹沢長介 1954 「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿台史学』4号
 戸沢充則 1955 「樋沢押型文遺跡」『石器時代』第2号
 1978 「押型文土器群編年研究素描」『中部高地の考古学』 長野県考古学会
 戸沢充則・山田昌久編 1982 『概報・樋沢遺跡』 岡谷市・塩尻市教育委員会
 戸沢充則編 1987 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
 戸田哲也 1988 「表裏縄文土器論」『大和のあけぼのII』 大和市教育委員会
 友野良一 1983 「向山遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷(三)
 友野良一・小池政美 1974 『養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡』養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会
 中島 宏 1986 「普門寺遺跡の押型文土器について」『利根川』7
 1987a 「中部地方における押型文土器編年の再検討」『埼玉の考古学』
 1987b 「埼玉県の押型文土器」『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館
 1988a 「埼玉県における押型文土器の様相」『縄文早期の諸問題』
 1988b 「関東地方における押型文土器の様相」『縄文早期を考えるー押型文文化の諸問題ー』帝塚山考古学研究所
 1989a 「『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』を読む」『信濃』第41巻第2号
 1989b 「長野県栃原岩陰遺跡における層位的調査成果の再検討」『利根川』10
 西沢寿晃 1982 「栃原岩陰遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷(二)
 林 茂樹 1962 「横山遺跡の斜縄文土器と押型文土器」『信濃』第14巻第3号
 1983a 「三つ木遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷(三)
 1983b 「高見原横山遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷(三)
 平川昭夫・広瀬高文・前嶋秀張 1986 『中尾・イラウネ・野台』長泉町教育委員会
 馬飼野行雄・伊藤昌光 1983 『若宮遺跡』 富士宮市教育委員会
 松島 透 1957 「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』第4号
 松田真一 1988a 「大川式土器と神宮寺式土器」『縄文早期を考えるー押型文文化の諸問題ー』帝塚山考古学研究所
 1988b 「奈良県出土の押型文土器の様相」『橿原考古学研究所論集』第八
 1989 『大川遺跡』 山添村教育委員会
 水島和弘 1985 『三沢西原遺跡』 菊川町教育委員会
 宮坂虎次 1971 『棚畑遺跡』茅野市教育委員会
 宮坂英弐・宮坂虎次 1966 「御座岩遺跡」『蓼科』 尖石考古博物館研究報告叢書第二冊
 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」『研究紀要』第5号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 宮下健司 1988 「縄文土器」『長野県史』 考古資料編全一卷(四)
 松沢亜生 1957 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』第4号
 1983 「細久保遺跡」『長野県史』 考古資料編全一卷(三)
 矢野健一 1984 「近畿地方における押型文土器前半期の編年案」『縄文文化研究会広島大会資料』
 1988 「押型文土器に関する考察」『奈良県天理市布留遺跡 縄文時代早期の調査』埋蔵文化財天理教調査団
 山田 猛 1988 「押型文土器群の型式学的再検討ー三重県下の前半期を中心としてー」『三重県史研究』第4号
 山内清男・佐藤達夫 1962 「縄紋土器の古さ」『科学読売』第14巻第12号
 八幡一郎 1972 『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究』(上)
 八幡一郎・上野佳也 1962 「長野県菅平東組の早期縄文式文化遺跡について」『考古学雑誌』第48巻第2号

研究紀要 第7号

1990

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 望月印刷株式会社